
君を守るために

ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君を守るために

【Nコード】

N1346A

【作者名】

ユウ

【あらすじ】

最終兵器彼女のちせのストーリー。

アツシが僕に『自衛隊に入る』と行ってから、しばらくたっていた。
アツシ「最近どーしたんだよ、シュウジ」

シュウジ「どーもしねーよ」

アツシ「そんなはずねーよ、見れば分かる。何年友達やってると思
ってるんだ？」

シュウジ「そうだな…」

アツシ「最近ちせちゃんガツコ来ないけど、なんかあったんか？」
シュウジ「……」

アツシ「黙ってねーでなんか言えよ！！いつも俺の相談のってくれ
てるんだ、俺も、お前に悩みあるなら相談に乗りたいんだ」

正直嬉しかった、悩みを一人で抱えたままにしておきたく無かった
し、アツシには伝えなければいけない、そう思った。

シュウジ「き、聞いてくれるのか？」

アツシ「当たり前だよ！親友だろ！」

シュウジ「…ちせは、今自衛隊にいるんだ、詳しい理由はいえねー
けど」

アツシ「ちせちゃんが自衛隊！？なんで？」

シュウジ「わりい、今はそれしか言えねえ」

アツシ「シュウジ、お前も自衛隊に行かないか？」

シュウジ「何でそうなるんだよ…、俺は意味の無い戦いなんかは絶
対したくねーんだ」

アツシ「戦うことが目的じゃねーよ！一緒にちせちゃん助けようぜ
！ちせちゃんが自衛隊にいるなんておかしーだろ？」

シュウジ「確かにそうは思うけど、どーしよーもねーんだよ！」

アツシ「どーしようもねえだど！？何もしてねーじゃねーか、それ
って逃げてるってことじゃねーのかよ！」

シュウジ「…！」

アツシ「何があったかはしらねーけど、このままでいいんか？一緒に
行こうぜ！」

シュウジ「そうかもな…よしちせを助けに行くわ」

僕は自衛隊に入った。

もちろんちせを助けるために。

シュウジ「俺がちせを助けたとしてお前はどうすんだ？」

アツシ「俺、戦争しに自衛隊入るのやめるわ、シュウジがちせちゃん
が遠くに行って悲しむように、アケミも悲しんじまうかなって思
ったんだ。」

シュウジ「そーか…それが一番だな！」

アツシ「でも俺も一緒にちせちゃん助けに行くよ！友達一人には行
かせらんねーし」

シュウジ「サンキュー、アツシ」

アツシ「またみんなで楽しく話したり出来るよな！」

シュウジ「当たり前だろ…！」

僕とアツシと他の自衛隊員を乗せた車が今、走っている。

しばらくして、他の隊員が騒ぎ始めた。

外を見ると、遠くの町を白い光が飲み込んでいた。

兵士「『ちせの火』だ、あの死に神またやりやがった！」

アツシ「『ちせの火』！？ちせてまさか！？」

シュウジ「…」

あれはちせがやったのか？僕はちせがやったんじゃないと、無理矢
理信じようとした。

アツシ「おい！シュウジどうなんだよ！」

シュウジ「わりい、まだ俺理解出来てねえんだわ」

アツシ「後で詳しく教えろよな！」

シュウジ「分かった。わりいな」

そのあとはずっと、白い光の事だけを考えていた。

…基地に着いた。

アツシ「集合時間までまだしばらくあるな、どうする？ シュウジ」
シュウジ「逃げる時のために、基地の中を少しでも理解したいから、見て回らないか？」

アツシ「そうだな！ 基地内は面白そうだし♪」

シュウジ「遊びじゃねーんだぞ！！」

アツシ「どーせすぐここであるんだ、楽しんでおきたいんだよ。」
シュウジ「そうか…じゃあ行くか。」

そして集合時間になった

アツシ「どこだよここ？」

シュウジ「さっきもここ来なかったか？」

アツシ「やべー、完璧遅刻だよ…なんかやらされんかな？」

シュウジ「とりあえず急ごう！」

到着してみると同じ隊の人の目は、冷たかった。

兵士「お前らのせいで、みんな腕立て100回だよ！」

シュウジ「すみません」

とりあえず謝った

すると…

兵士「さっきちせにあったよ…あんな冷たい女ははじめてだ。」

シュウジ「…。」

アツシ『やっぱりちせってちせちゃんのことなんかな』

腕立てを終えると、僕たちは思いがけない人にあった。

シュウジ「テ、テツ先…輩？」

アツシ「…テツ先輩？」

テツ「誰だ？」

シュウジ「俺です、シュウジです。駅伝でも一緒に走った。」

テツ「シュウジか：お前何しにきたんだ！ここはお前の来るようなところじゃねーぞ！！」

シュウジ「：俺は、自分の好きな女を助けるためにここに来ました！」

テツ「アホ！！」

アツシ（なんとなくシュウジに似てる：）

なにか考えてたらしく、アツシはにやけていた

テツ「何バカな事言ってるんだ！助けたいなら側にいてやれ！戦場にきちまったら：俺みたいに、もう戻れなくなるんだぞ！！」

シュウジ「：戦場に彼女はいるんです。」

アツシ（やっぱり：あれが：）

テツ「戦場に女：ま、まさかちせのことか！？」

僕は黙ってうなずいた

テツ「：そうか、ってことはちせの言ってたシュウちゃんは、シュウジだったんか：」

シュウジ「……！ちせの事なんか知ってるんですか！？」

テツ「上官として前の軍隊で、一緒だったんだ：」

先輩は悲しそうに話していた：

アツシ「前の軍隊で、何かあったんですか？」

テツ「前の軍隊で残っているのは……俺と、ちせだけだ：」

シュウジ「……」

アツシ「すみません、変な事聞いて：」

テツ「きにすんな：」

シュウジ「こんな話してるときにすみません：ちせの話くわしく聞かせてくれませんか？」

テツ「後で俺の部屋呼んでやるよ、その時俺の知ってる事教えてやる。そしてお前らのことで手助け出来ることはしてやるよ」

そういつてテツ先輩は行ってしまった

アツシ「シュウジ：もう俺にも隠さないでくれよ」

シュウジ「後で全て話すよ」

そして夜になった：

シュウジ「アツシ：ちせの事何だけど：自衛隊にある最新の兵器って知ってるだろ？」

アツシ「ああ：」

シュウジ「あれが：ちせなんだ」

アツシ「：！そうなのか：」

シュウジ「驚かないのか！？」

アツシ「お前とテツさんの話聞いてたら何と無く分かった：それに現実見るまではやっぱり信じられない：」

シュウジ「アツシは、現実は見ないほうがいい：」

「・・・」

テツ「こら！話なんかしてるな！こころへんを人が通ったはずなんだが、見えなかったか？」

シュウジ「すみません、見てませんでした」

テツ「アホ！：いやお前らの場合はそれでいいかもな、変に戦争に慣れちまうよりは：」

「いーか？俺が様子を見てくる、お前らはここにいろ」

「「はい」」

テツ（敵であればいいな、民間人だと面倒臭いし）

そんなことを考えながら人影に向かって行った

テツ「また泣いているのか？ちせ」

ちせ「テツ先輩：」

目に涙を溜めたちせはテツに抱き着いた。

テツ「とりあえず涙拭け、」

ちせ「zzz」

テツ「寝てやがる：とりあえず部屋に連れていくか：シュウジ達呼んでくるか」

テツ先輩が戻って来た。

テツ「シュウジ、アツシちょっと来い！」

2人「はあ…」

そして着いて見てみると、眠った女の子がいた
シュウジ「ちせ！」

テツ「アホ！静かにしろ！寝てるんだ」

シュウジ「すんません」

テツ「とりあえず、俺の部屋に連れていくから、シュウジお前おぶ
っていけよ！」

シュウジ「はい！」

それからテツ先輩の部屋に向かった。

その途中

アツシ「疲れたか？代わりにおぶってやるぞ」

シュウジ「大丈夫だ！」

テツ「シュウジにおぶらせておけ！ヤキモチやかれても困るだろ？」

シュウジ「ヤキモチなんて…」

アツシ「そうですね♪」

シュウジ「アツシてめー！覚えてろよ！」

アツシ「それにしても…久しぶりにみたよ」

シュウジ「そうだな…しばらくちせガッコにも来なかったし…」

アツシ「そうじゃなくて…久しぶりに笑顔のシュウジを見たなって、
そう思ったんだよ。」

シュウジ「わりい色々心配かけて。」

テツ「おーい！早く来い！ここが俺の隠れ家だ」

テツ先輩の家に着いた。

そして着いた途端に時間が遅かったのと、疲れで眠ってしまった。

そして朝…

テツ「シュウジ、やっと起きたか」

シュウジ「ちせは？」

テツ「まだ寝ている、逃げるのは飯食べてからでもいいだろ？」
シュウジ「そうですね」

テツ「なら、お前ら食料持ってこい」

アツシ「俺もですか!？」

テツ「当たり前だ! 一人じゃいざというときあぶないだろ」

アツシ「分かりました」

シュウジ「でも…食料といっても、どこで手に入るんですか？」

テツ「そんなのは、そこら辺のコンビニのシャツターでも壊して、
それで入れればいい」

シュウジ「分かりました、じゃあ行ってきます。……あっ! テツ先輩」

テツ「なんだ？」

シュウジ「ちせに変な事しないで下さいね」

テツ「アホ! しねーよ! つーか子供には興味ねーしな」
シュウジ「じゃあ行ってきます」

…しばらくして

テツ「それにしても、こいつはよくねるな」

ちせ「くかーっ」

ちせが目を開き起き上がった。

ちせ「ん…あ…え？」

ぼーっとしながら辺りを見回していた

ちせ「…夢かな? どっちが夢かな…? 全部…夢だったらいいなあ…」
そしてテツの存在に気付いた。

テツ「よお。起きたか？」

ちせ「テツせんぱい…」

顔を真っ赤にした

ちせ「あちゃー」

ちせ「あ…あの…ここは？」

テツ「ん? ここは俺の『ヒミツの隠れ家』だ。」

ちせ「寝顔見たんですかあ？」

テツ「色々と我慢すんの大変だった。一人じゃ我慢出来なかったか

もな」

ちせ「他に誰かいるんですか？」

テツ「すぐに分かる。そんなことより、一晩中つけた涙と鼻水とヨダレ洗い流してこい！そんな顔人に見せたくないだろ」

ちせ「はい」

ちせが顔を洗っていると

アツシ「只今戻りました、カップ麺買ってきたんで、火借りますね」
テツ「おう！勝手に使ってくれ」

アツシ「俺がやっておくから、お前はちせちゃんのとこ行ってやれ！」

ちせ（この声は…アツシ君かな…）

シュウジ「ああ…わりいな」

僕はすぐにちせの寝ていたベットに向かった。

シュウジ「あ、あれ？ちせは？ま…まさか！？」

テツ「そんなに慌てるな！今顔洗ってるよ」

ちせ（え…今の声は…）

シュウジ「ちせ！！」

ちせ「シュ、シュウ…ちゃん？」

ちせは僕に抱き着いて来た、僕はそれを優しく包みこんだ。

ちせ「シュウちゃん！シュウちゃん。もう離れるのはいやだよ。もう…こんなのは…いやだよ…！」

ちせは泣いていて声にならないような声で、僕に言った。

ちせ「ずっと会いたかったんだ…、離れれば離れるほど、シュウちゃんと会いたい気持ちが強くなっていくんだ。ずっと寂しかったんだ」

シュウジ「ごめんな…また俺ちせにつらい思いさせちゃった。もう、二度と離れないから…俺、あの日からちせに対してどう接していいのか分からなかったんだ。」

ちせ「え……」

シュウジ「でも、俺バカだからやっと気付けたんだ。ちせは付き合
い始めてから、今まで、何も変わってないって、ちせはあの時も、
今も、これからも…俺にとって大切な彼女なんだって、やっと気付
けたんだ」

ちせ「シュウちゃん…」

シュウジ「ちせ！お前はここに残る必要なんてないんだ！だからも
う…ここから逃げよう…」

ちせ「うん…うん」

シュウジ「あの街で、一緒に暮らそうぜ」
ちせ「うん」

テツ「会って早々イチャついてんなよ！」

シュウジ「別に…イチャついてるわけじゃ」

テツ「シュウジ、ありがとな」

シュウジ「…？」

テツ「お前らが逃げるの、俺は手伝うだけにしておくつもりだった
んだ、でもお前ら見てたらふゆみに会いたくなってな…」

シュウジ「テツ先輩！じゃあ」

テツ「ああ…4人でここから逃げよう…」

シュウジ「はい！」

そして4人で逃げる事になった。

この時僕は日本は平和じゃなくても、僕等は幸せだと思っていたん
だ…

幸せはずっと続くと思っていたんだ…

ちょうどその頃、自衛隊では

上官「また、ちせがいなくなっただど！」

兵士「はい、そのように報告を受けております」

上官「あのお荷物め、自分の立場を分かっているのか！」

兵士「また、ちせをどこかの部隊に捜させますか」

上官「そんなことをしても、また同じ事の繰り返しになるだろう」

兵士「なら、ちせは戦線から外すのですか？」

上官「そんなことは言っていない、ちせではなくちせには大切な男がいると、下から聞いた。そいつを捕まえろ！特徴は監視部隊に聞け！」

兵士「はっ！了解しました！」

兵士「失礼します！」

監視部隊員「上から聞いています。ちせ一尉の彼氏の情報ですね」

兵士「はい！」

監視部隊員「ご苦勞様です。特徴はここに載せてあります。」

兵士「ありがとうございます。」

ちせ探索部隊にて：

兵士「隊長、これを」

といって、監視部隊に渡された紙と上から命令を伝えた。

隊長「ご苦勞だった、それじゃあ持ち場にもどれ」

兵士「はっ！」

隊長「全員整列！」

探索部隊が全員揃った

隊長「只今司令が入った。ちせ一尉の彼氏である男を捕らえろ！その男の特徴は身長は180cmくらい眼鏡をかけていて、鼻が低い、髪は灰色で目が細くするどい、以上だ！ちせと離れたときを狙え」

「「はい！！」」

僕等の知らない間に、自衛隊は大きく動いていた。

その頃僕等は

テツ「大丈夫か？」

ちせ「はあはあ、ごめんなさい」

シュウジ「大丈夫か？無理はすんなよ」

アツシ「あと、どのくらい距離あるんですか？」

テツ「もうそろそろ、軍の行動範囲外だ」

アツシ「街はそこから近いんですか？」

テツ「距離は一日中歩けば着くくらいだ」

ちせ「一日中……」

シュウジ「大丈夫だ！行動範囲の外にさえできればいいんだから、一日で行く必要もないから」

ちせ「大丈夫、あたし頑張れるよ！」

それから一日中歩き続けた。勿論到着はしていないが、見覚えのある風景が見れるところまで来た。

歩き続けてこれで2日目になった、テツ先輩は途中道が違うため、離れた

シュウジ「早く来い！ちせ、俺達の街だ戻ってきたんだ。」

ちせ「……」

アツシ「ちせちゃん？」

ちせ「ア、アケミ……アケミの生存反応が正常値じゃない」

そう、昨日地震がこの街を襲っていたんだ

アツシ「アケミが！？」

シュウジ「どーゆー事だよ！？ちせ！」

ちせ「生きている……でも危険な状態」

アツシ「ちっくしょ……っつっ！」

アツシは走り出した！

シュウジ「俺達も行くぞ！ここからアケミンちはそう遠くはない。」

ちせ「うん！」

僕たちは急いでアケミのもとに向かった。

そしてアケミの家

悪い予感がした。ちせがアケミの家に行く途中、『ごめんね』といって泣き出したから

アケミの部屋のドアを開いた。

アツシが泣いていた。アケミは顔に包帯を巻いて眠っていた。普通に眠っているのはちがかった。

息を……していなかった

アツシ「アケミ、ごめんな……ごめんなあ、うわああ〜」

ちせ「……」

シュウジ「どうしたんだよ！アケミ、俺勝手に自衛隊に行ったんだぜ！怒らないのかよ！」

ちせ「シュウ……ちゃん」

シュウジ「いつもみたいに怒れよ！怒ってくれよ」

返事は……なかった

アツシ「アケミ、今から俺も、そっちに行くよ……シュウジ、ちせちゃん、じゃあな」

シュウジ「アツシどういう意味だよ！」

アツシ「冗談だよ……」

シュウジ「冗談でもそんなこと言うな！！」

アツシ「わりい、俺先行くわ！じゃあな」

シュウジ「ああ！またな！」

僕は、この時気付け無かった。『先に行く』という意味を。アツシを一人にするべきじゃなかった

アツシが外に出てすぐ

パンッ！！

シュウジ「軍隊が来たのか！？」

ちせ「シュウちゃん……アツシ君が」

ちせはまた泣き出した。

シュウジ「アツシ！」

急いで外に出た。そこには右手に銃を持ち、頭から血を流して、倒れたアツシがいた。

シュウジ「アツシ……嘘だろ！？」

ちせ「アツシ君……」

シュウジ「ちせ、俺の部屋に行こう。」

ちせ「うん…」

シュウジ「俺達は生きような…」

ちせ「うん」

一日に大切な親友が二人いなくなった。

僕等は生きることに対する気持ちが大きくなった。

ちせ「シュウちゃん」

シュウジ「ん？」

ちせ「シュウちゃんの家行く前に、あたしの家寄っていいかな？」

シュウジ「そうだな、お前の親父さんとかおふくろさん心配だしな」

ちせ「ごめんね？」

シュウジ「気にすんなよ、それよりごめん」

ちせ「え…？」

シュウジ「俺が先に気付いてやるべきだったよな、彼氏なのに…そんなことにも気付いてやれないで、自分の事ばかりでごめん」

ちせ「そんなことないよ！あんな事あった後すぐだし、仕方ないよ…」

シュウジ「サンキュー…わりいな」

ちせも僕も明らかに今までとは違っていた…逃げて幸せなはずなのに…何でこんなにも不幸なのかと、自分の不幸な運命を恨んだ

ちせ「シュウちゃん、じゃああたしお母さんとお父さんと、あとカズちゃんにお別れしてくるから待ってて」

シュウジ「おう！なんかあったらすぐ呼べよ！」

ちせ「うん！シュウちゃんありがと」

そしてちせは自分の家の中に入って行った

ちせ「ただいま」

ちせ母「ち、ちせ？」

ちせ「ご、ごめん…なさい」

ちせ母「パーパ！カズちゃん！」

ちせ父「……」

カズ「うるさいなーママ、今いいとこなんだよ！」

ちせ母「ちせが…戻って来たのよ」

カズ「ふーん…おかえり、ねーちゃん」

ちせ「ただいま…」

ちせ母「今までどこ行ってたの！パパもママも心配したのよ！」

カズ「ママ、ねーちゃんも年頃何だしそのくらいしやうがないんじゃない？」

ちせ母「カズちゃんは黙りなさい！」

カズ「はいはい、じゃあ僕はゲームしてるよ」

ちせ母「なんで今まで連絡くれなかったの？」

ちせ「ごめんなさい」

ちせ母「ごめんなさいじゃなくて、理由をいいなさい！」

ちせ「…ごめんなさい」

ちせ母「とりあえず靴脱いで、部屋に戻りなさい」

ちせ「お母さん、ごめんなさい、あたしもう行くね…」

ちせ「最後にお別れだけしたくって、だから戻ってきたんだ…」

ちせ母「ちせどこに行くの？」

ちせ「分からない…でも遠くに行くと思う、大切な人がいるの、その人が待ってるからごめんなさい、行ってきます」

ちせ母「ちせ…！」

最後の別れの挨拶をちせは終えた…

泣いたら余計に心配されるところってちせは泣かなかった。

ちせが家族と話しているとき

シュウジ「ちせ、大丈夫かな…？」

？「シュウジさんですね？」

シュウジ「…！…誰だ！？」

シュウジは囲まれていた、今の自分の服装と同じ連中に…そう…自

衛隊に

シュウジ「ちせを捕まえに来たのか!？」

兵士「いいえ違います」

シュウジ「ちせが目的じゃない!? ならなんで？」

兵士「: あなたを捕まえに来ました」

シュウジ「なっ: ! 俺! ?」

シュウジは複数の兵士につかまり、話すことも、動くことも出来ないまま、自衛隊員が多く乗る車に乘せられた。

車の中でやっと開放されたシュウジは

シュウジ「目的は何だ? なんで俺がつかまるんだ」

兵士「やはり私達にはちせが必要何ですよ、ちせが捕まえても逃げるなら、大切な人を人質にとればいい、そう上が判断しました」

シュウジ「: ! な、なら俺はちせが戦うために、利用されるのか! ?」

兵士「そういうことになります。」

シュウジ「なんでだ! ? 何でちせがあんな目に会わなければ行けないんだ!」

兵士「それは、私達には分かりません、後で上に会ったら聞くと良いでしょう。」

シュウジ「あんたら恥ずかしくないのかよ! ! あんたらはちせや俺みたいな子供を救うために、自衛隊にはいったんだろ! 今のあんたらは救うどころか救われてる立場だろ! なんでちせがあんたらを救わなきゃいけないんだ! !」

兵士たちはこっちを睨みつけた

兵士「少し黙ってて下さい」

シュウジ「: : : : !」

その後後ろの兵士に、なんらかの薬をすわされ、寝てしまった:

ちせ「シュウちゃん、ごめんね、遅くなっちゃった。」

もちろん、シュウジの返事はなかった:

ちせ「シュウちゃん？…シュウちゃんどこ？」

そこにはシュウジの代わりに、自衛隊の人が数人いた

ちせ「シュウちゃんどこやったの？言わないとどうなるか、分かるよね」

兵士「ちせ一尉、あなたの大切な御友人は、只今自衛隊のほうに連れていきました！」

ちせ「…！あんたらそんなことして、どうなってもいいんかい？」

兵士「ちせ一尉が私を殺したら、御友人の命もただじゃすみませんよ？」

ちせ「…何が目的で、あたしでなくてシュウちゃんを？」

兵士「人質でもないかと、もうあなたは、我々の命令を聞かないでしょう？」　ちせ「なら、あたしが自衛隊に戻ったら、シュウちゃんは無事に帰してあげるの？」

兵士「そうすれば命だけは、助かると思います。」

ちせ「分かりました。あたし行きます。だからシュウちゃんに会わせてください」

兵士「会うくらいならいいと思います。しかし、二人きりにするのは無理ですね。」

ちせ「分かりました」

シュウジ「くそ！せっかく逃げたのに、俺のせいで…」

兵士「うるさい！静かにしている！そろそろ上の方がいらっしゃる」

シュウジにはいつでも周りに3人以上の兵士がついていた。

そして、自衛隊ではかなり身分の高い人が来た

上官「お前が、ちせの恋人か」

シュウジ「そうだ！文句あるのかよ！」

兵士「自分の立場を理解しろ！死にたいのか？」

上官「まあいい、とりあえずお前を利用させてもらうぞ、お前がここにいればちせはかならずここに来る。」

シュウジ（すまないちせ：出来れば来ないでくれ）

シュウジ「聞きたいことがある」

上官「なんだ？言ってみろ」

シュウジ「なんで、ちせが選ばれた！？」

上官「そんなの簡単な事だ！日本の最終兵器となる人間は、力を他の事に利用されては困るからな、ちせのような気の弱くて、力を我々のために使ってくれる者を選んだ」

シュウジ「：ならなんで、あんたらがならない！あんたらがなればいいことだろ！！」

上官「兵器になるということは、人じゃなくなるんだ、我々は人でありたい」

シュウジ「そんな：勝手過ぎるだろ！ちせだって生きたいんだ！」

上官「人一人の命で、何万、何十万の人が助かるんだ、ちせも本望だろう」

シュウジ「また勝手な判断だろ！ちせは：ちせは、人を助けたいけど殺したくはないんだ」

上官「ちせに悪いとは我々も思う、でも仕方ないんだよ」

そういつてさっていった：

兵士「仕方ないだってさ、気の毒だな、お前も、ちせも」

シュウジ「……」

兵士「そうくさるな！最後にちせに会わせてもらえるだけでもましだろ」

シュウジ「：！ちせはここにいますか！？」

兵士「今いるかは分からないが、いずれ来る」

シュウジ「そうすか：」

兵士「会えると言っても、周りに兵士がいるがな」

シュウジ（なんとかまた、逃げる方法を考えないと：）

するとほかの兵士が来て、僕の側にいる兵士に何やら話はじめた

兵士「ちせが来た、付いてこい！」

兵士にちいて行ったら、個室に着いた…ちせがいた

ちせ「シュウちゃん！」

シュウジ「ちせ！何で来た！ここに来るって事はまた戦うってことだぞ！人をまた殺す…ってことなんだぞ！」

ちせ「ごめんなさい…分かってる、けどシュウちゃんは生きててほしかったから…」

シュウジ「アホ！いいか？絶対もう戦うな！俺の事はいいいから…」
ちせ「でも…」

シュウジ「もし、ちせがまた自衛隊に戻るなら、俺は死ぬ…」
ちせ「…え？シュ、シュウちゃん…」

今僕たちの周りには一人だけ兵士がいる、その兵士は困ったように言った

兵士「お前、正気か？たかが女一人の為に何で命を賭ける？」

シュウジ「何焦ってるんだ？そうか、あんたらは俺が死んだら困るよな？俺が死ねば日本は負けるんだからな」

ちせ「シュウちゃん…」

シュウジ「大丈夫、こいつらは俺を殺せないさ！もし殺されても、ちせが自衛隊に戻るよりいい」

ちせ「…分かった、あたし自衛隊に戻るのやめる…だから…死んじやだ…」

ちせは泣いた…こんなに泣いたちせを見たのは始めてだった

そこにいた兵士は焦って上に報告に行った、僕等を監視する兵士はまたすぐに他の兵士が来た

しばらくして

兵士「上からの命令だ……」

兵士は僕に銃を向けた

ちせの背中には羽が生えていた

シュウジ「ちせ…約束だからな！」

ちせ「…うん」

そうしたら兵士は銃をおろした

シュウジ「どうした？俺を殺さないのか？」

兵士「上からの命令です。戦わないちせは用済みだと」

シュウジ「…なら!？」

兵士「はい、好きにしてください」

信じられなかった…自衛隊がちせを捨てた、嬉しくて泣いた…

そしてすぐに僕等は自衛隊の基地を出た。

前とは違い、逃げているんじゃない、自分の家に帰るといふ形で…

僕の家についた

シュウジ「とりあえず今日は、俺の家で寝るべ、明日からの事は明日考えようぜ」

ちせ「うん」

この時僕は気付いていなかった、しかしちせは分かっていた、でも口には出せなかった…

もうすでに、メンテナンスと薬もなしで丸3日もいる。

そう、ちせは分かっている僕にだけは言えなかったんだ、自分の命は長くないと…

シュウジ「ただいま」

母「シュウちゃん…パパ！シュウちゃんが帰って来た」

母さんは泣いていた…無理もない、こんな戦争がある中で、息子が1週間近く勝手にいなくなったのだから…

ちせ「お、おじゃまします…」

ちせが入ると、母さんは涙をすぐに拭いて

母「あら、いらっしやい、もしかしてシュウちゃんの彼女？名前は？」

いきなり元気になった

ちせ「あ、はい、ちせです」

シュウジ「こいつ、今日一日だけ泊まるから」

普通の親ならそんなこと許さないだろう…しかし

母「ふふ…シュウちゃん、じゃあ私とパパはお邪魔しないようにしないといけないね」

シュウジ「大丈夫だよ！母さんが思っているような事はしないから」
母「そうなの？ちせちゃん」

ちせは顔が真っ赤だ

ちせ「…はい」

シュウジ「ちせ！いくぞ！」

ちせ「うん」

時間はもう遅かった、僕等は寝ることにした

母さんが入って来てもいいように、ベッドにちせがねて、僕は床で寝た

そして朝

シュウジ「いつまで寝てんだ？ちせ起きろ！」

返事は無かった

シュウジ「ちせ？」

ちせの胸に手を当てた…心臓の音がしなかった

シュウジ「心臓が止まってる！？…それは前からだべや…」

などとノリ、ツツコミしてしまった…

シュウジ「ちせ！起きろよちせ！」

だんだん嫌な予感がしてきた…

僕は恐る恐る、ちせの口元に手をあてた

シュウジ「息をしていない！！」

そう、ちせはもう…生きていなかった

シュウジ「嘘だろ！？昨日まで元気だっただろ？起きろよ！ちせ…

うわあああああつ…う…うう…つ。あつあつ…」

僕は泣いた、それこそ涙が枯れるほどに

シュウジ「ちせ…もう疲れたよな？ゆっくり休むべ、おやすみ…そ

うだ、アツシやアケミに会えたか？みんな元気か？俺は遅れるから、後でちゃんと行くからな」

ちせはもう息をしなくなった…

もう二度と目を開かなかった…

もう返事をしてくれなくなった…

一ヶ月ほどして大きな地震とともに津波が街を襲った。

僕はちせとアケミ、アツシが待つ所に行った…

—END—

(後書き)

おもいきりBUTENDです…始めはHAPPYENDにするつもりでした。なんか書いているうちに涙が出たりしました…落ち込んだりもシュージの目的であるちせを戦わせない!という目的は達成出来たので、そこは自分としてはよかったとみなさん感想いただけたら光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1346a/>

君を守るために

2010年10月10日03時45分発行